

平成29年8月19日(土)

老球の細道350号

「終戦の日」にちなんで

会津バスケットボール協会 室井 富仁

毎年この時期になると、日中戦争、太平洋戦争など、いわゆる15年戦争のことが話題にのぼる。会津では今年「戊辰戦争150年」ということで戊辰戦争も話題になっているが。毎日のように戦争関係の映画とドキュメンタリーをテレビで見ている。先日観た映画『日本の一番長い日』では、日本の戦争指導者達の愚挙がどれほど多くの一般日本人を死に追いやったかを考えさせられた。そして一人で激怒し、血圧を上げてしまった。

思い出すのは1999年夏休み、会津高校バスケットボール部を率いて米国インディアナ州エバンズビル大学で合宿をした時のことである。その時一人の米国老人から声をかけられた。私が日本人であることを確かめたら、古く黄ばんでぼろぼろになった一冊の手帳を見せてくれた。太平洋戦争最後の激戦地、沖縄で散った日本人兵の遺留品だった。「鬼畜米英」の文字や英単語などがたくさん書き並べてあった。死にゆく日々を予感しながら、自分の想いを書き連ね、自分の生の足跡をこの手帳に残しておきたかったのか。

日本に帰って来てから反戦の本『きけわだつみのこえ』(東大協同組合出版部 1949年刊)を読む機会があった。戦後、二度と無意味な殺戮を繰り返さないようにと、若き学徒兵達の真摯な声を集めて作られた本である。

冒頭に記されている「追いつめられた若い魂が、自然死では勿論なく、自殺死でもない死、他殺死を自ら求めらるるように、またこれを「散華」と思うように、訓練され、教育された若い魂が、若い生命のある人間として、また夢多かるべき青年として、また十分な理性を育てられた学徒として、不合理を合理として認め、いやなことをすきなことと思ひ、不自然を自然として考えねばならぬように強いられ、縛り付けられ、追いこまれた時に、発した叫び声が聞かれる」の文は心を打った。

親、兄弟への愛情の念。死を前にしながらも寸暇を惜しんでの学問への執着。今までなんとなく生きてきたことへの後悔。他人の思惑によって自分の生が翻弄される無念さ等々。たくさんの叫び声に胸が打たれる。戦争を知らない世代は特に、このような書物に随時触れながら戦争の悲惨さを風化させないようにしなければならない。

終戦から72年の今、北朝鮮とアメリカの指導者が連日のように戦争の危機をちらつかせ、わが日本もアメリカチームの一員として参加しなければならないような情勢である。戦争は経験しなくとも、悲惨さは想像だけで十分学習できる。命は1回きりで終わる。誰のために戦うのか。バスケットボールはわかるが、戦争はわからない。

私がこの世に生を受けて一番幸せだったのは、一度も戦争を経験しなかったことである。多少の自然災害には遭遇したが、戦争の被害と恐怖に比べればたいしたことではない。まだ少し人生の暇つぶしの時間が残っているが、命のやり取りは病気か寿命くらいですましたい。何の怨み、つらみもない人たちと、国の指導者の偉い人たちのために命のやり取りなど真っ平御免だ。私は必殺仕掛人ではない。必勝仕事人でこの世の生を全うしたい。

『きけわだつみのこえ』の解説にある言葉が警鐘を鳴らす。

「流された血はふたたびそれが決して流されぬようにすること以外によってはつぐなわれぬのである」